



国際共生創成協会 熊野飛鳥むすびの里
代表：荒谷卓

日本戦闘者



荒谷卓（あらや たかし）
生年月日：昭和34年秋田県出身
略歴：昭和53年東京理科大学、陸上自衛隊に入隊、第19普通科連隊、調査学校、第1空挺団、第39普通科連隊、陸上幕僚監部防衛部、防衛局防衛政策課戦略研究室等に勤務。平成16年特殊作戦群初代群長に就任。平成20年依願退職(1等陸佐)。海外留学：ドイツ連邦軍指揮大学及び米国特殊作戦学校。
平成21年9月～30年10月、明治神宮武道場至誠館館長。
平成30年11月三重県熊野市に「国際共生創成協会：熊野飛鳥むすびの里」設立、代表を務める
著書：『戦う者たちへ』『サムライ精神を復活せよ』『特殊部隊vs.精鋭部隊—最強を目指せ』並木書房／『自分を強くする動かない力』三笠書房
熊野飛鳥むすびの里のHPアドレス
<https://musubinosato.jp/>

040

今回は、「情報」と「決心」について話をします。日本人は、欧米人に比べると一般的に人柄がよく正直なので、見て、聞いて、読んだものを素直に信じる傾向が強いようだ。さすがに最近では、こんな世の中だから、対人不信や社会を批判的に見る人も多くなったが、そんな人でさえ、特定の情報ソースから発信される情報は鵜呑みにすることが多い。その情報ソースの信頼性を評価せずにだ。

また、何事にも無関心な人は、そもそも情報そのものに興味が無い。例えば、駅の改札やチケット売り場近くの旅行案内には、観光関連の地域情報紙が置いてあるのだが、旅行や観光に関心のない人は、その情報紙が置いてあることにすら気が付かないだろう。そんな人でも、家に帰ればテレビやSNSを暇つぶしのように眺めては、特に批判するほどの情報を持ち合わせていないので、「ふ〜ん。そうなんだ」といった具合に、無意識のままテレビ報道等に洗脳されて毎日を暮らしているのではないだろうか。

他方、情報マニアのような人は、インターネットを通じてありとあらゆる情報ソースにアクセスして情報を取りまくり、物知り博士かウंचクスの鬼の

ようになっているケースも多くなった。このタイプの人は、膨大な情報に触れているので一定の情報評価はしているはずだが、現地まで行って現実・実態を直接見聞きしたり、それが真実かどうか自分で試してみることをしないのならば、所詮その情報の信頼度と正確度は眉唾としかいえない。

今回、情報の話をするにあたり、使用する言葉を整理しておくことにする。情報は、自分自身で一定の分析評価をする前のものは、あくまで「情報資料 (information)」であり、分析評価が終わって初めて「情報 (intelligence)」として扱う。

情報資料は、先ずはその出どころ、つまり情報ソースの「信頼度の評価」が必要となる。この評価は、その情報ソースの過去の実績で評価することになる。「信頼度」を仮に5段階評価として、「1」は「信頼度が低い」、「5」は「信頼度が高い」とすると、例えば、NHKやCNNやBBCのようなマスメディアは、最も大きな報道機関でありながらもグローバルリストの大衆洗脳ツールとして確立されているものなので、信頼性の評価としては「2」～「4」になる。つまり、『完全な嘘は言わないかもしれないが本当の事も言わない』といった

ところ。自分が直接運用するエージェントや心から信頼できる熟知の人物は「信頼度5」。初めて見聞きするソースや特定のスポンサーの後ろ盾の組織や人物の情報には「信頼度1」。ただし、「信頼度1」だからと言って排除はしないのが重要。それはそれで、偽情報に秘められた意図を見抜くのに役に立つからだ。

次に、情報資料の「正確度の評価」が必要である。「正確度の評価」は、常に事実との関連性で評価する。事実が全く不明である段階では、正確度の答えを出してはいけない。先走って評価すると誤った情報になる。より客観性をもって正確度を評価するのであれば、情報内容に基づいた分布

図を構成してみるといい。例えば、ワクチンは「安全」か「危険」か？ という指標と、ワクチンは「効果がある」か「効果がない」か？ の指標で4事象の図を作り、夫々の情報資料の内容を分類してみるとよい。ワクチンの安全性と有効性は、時間とともに事実確認が進むことで、正確度の高い情報ソースの母数が増え真実が明らかになる。これも「正確度」を仮に5段階評価とすれば、事実確認が出来たものは「正確度が高い」[5]。全く裏づけの無いものは「正確度が低い」[1]となる。

このやり方では、「信頼度5」で「正確度5」の情報ソースはとも有効な情報資料と評価され、「信頼度1」で「正確度1」の情報資料は無効な情報資料となる。繰り返すが、無効な情報資料と評価されても、そこに多数の情報資料が集約するようであれば、それにはフェイクを信じ込ませようとする特定の意図があることを読み取らなくてはならない。

このようにして情報資料を分析してゆくと、徐々に信頼性も正確性も高い情報、つまり「正しい情報」が浮かび上がってくる。問題は、ここからである。そもそも、「正しい情報」を何の目的でどのように使うのかという問題だ。往々にして、情報マニアの人や勉強好きな人は、ここが終着点になってしまうケースが多い。分業体制の中で、情報収集・情報分析業務を専門としている人も、情報資料の情報化が仕事なので、務めて客観性をもって分析することに努める。それは自己の主観を排除することになる。主観を排除するということは、自分では決心をしないということだ。その情報を使う前提となる「意志」と「価値観」は、業務を命じた人の専有事項で、軍隊のような組織では、指揮官以外は決心をしない仕組みになっている。

さて、重要なのは、情報収集・情報分析のような情報業務と意志決定との関係である。これには二つのタイプがある。一つは、取り敢えず情報を収集・分析してから何をどうやるかを決めようとするタイプ。もう一つは、何をやるかをあらかじめ決めて、それを実現するために必要な情報を収集し分析するタイプだ。

前者のタイプから説明しよう。実は、陸上自衛隊にはこのタイプの指揮官が多い。根本原因は「戦う現場」を持たないことだと思うが、もう一つ、教育の基本が幕僚業務を主体としているこ

とである。幕僚業務とは、いわゆる指揮権を持たないスタッフの仕事だ。意思決定・命令権者は別にいて、専らそれを支えるための合理的・論理的見積もりと計画作成を所轄する人たちが、マニュアル化された思考手順に従って業務を進める。その思考手順は、状況の特質を把握し、任務を分析し、その後、地域、情報、作戦の手順で見積もりを進めるといった具合だ。これ自体には問題はないのだが、こればかりだと指揮官としての意思決定の訓練が欠落している。いったい何時、指揮官が意思決定をするのが大事だ。

情報活動は作戦を通じ継続的に行われるが、情報業務の最初の大きな集約点が情報見積もりとなる。ここで、敵の行動に関する見積もりの結論が要求されるからだ。しかし、この時点では敵の実態の行動は確認できず、一般的な敵の編成装備や戦術の合理性、そして地誌・気象の可能性を頼りに敵の行動を予測し結論することになる。必然、合理性が優先し陳腐な見積もりにならないを得ない。ここまでのプロセスにおいて、指揮官の決心がない場合、その陳腐な情報見積もりを基に作戦見積もりをすることになる。そして、その作戦見積もりの結果がそのまま指揮官の決心になることが多い。これは、幕僚の見積もり通りに計画を作成し、その計画に基づいて作戦を遂行するという指揮官の意思決定がスタッフの合理的分析に飲み込まれてしまった在り来りの作戦行動となる。そのようにして作成された作戦は、往々にして、現実の情報を無視した計画墨守の作戦となり、非合理的奇襲や状況の変化に対応できずに壊滅的な状況を迎える。いわゆる「お役所仕事」と言われるのもこれである。現実や人々の実態状況を見ずに、法律通りに仕事をするので社会は何時まで経っても一向に良くならない。

後者の場合は、かなり違ってくる。指揮官が、上級指揮官から与えられた命令に基づき、任務達成のための基本方針を先行的に決心すれば、スタッフたる幕僚は、指揮官の意志を基にそれを具体化するための見積もりを行う。当然ながら情報活動は、全てそのために指向される。敵がまだ行動を起こしていなくても、こちらが試したいことが実現できるかどうかということのため情報収集・情報分析に集中できる。これだけで、エネルギーの無駄が相当

解消できる。

一般的なことに言い換えれば、やたらと情報を収集・分析しても、予め決心が定まっていないと、情報収集・情報分析にかけたことすべてが無駄になる。先ずやるべきことは、自分が何をするか意思決定である。今の社会がよくないとわかっていても、では、どういう社会にすればいいのかのビジョンを確立している人と、ただ現状に不平不満を持っている人では、情報収集の仕方から違ってくる。後者の人が、いろいろ情報を収集して『なぜ現代の社会がよくないか』を知り得たとしても、では『どうしたらいいか (決心)』がわからない。前者の場合は、『どうしたらいいか (決心)』から始まっているので、そのために必要な情報を収集し「決心」を具現していける。

自ら考えるという習慣が完全に欠落していると間違いだらけの結果に至る。昔の日本の戦闘者は、自ら情報を収集し分析していた。だからこそ、幕末の改革は、下級武士から起こった。そして、自分の意志と価値観が具現できない場合、潔く脱藩し自らの価値観を実現できる道を選んだ。それが日本の戦闘者の精神である。自分のやるべきことがよくわからないから、取り敢えず情報を収集しようというようなショボイ魂胆ではない。奴隷制度の延長にある欧米式の軍隊組織の真似をしていると、兵隊は自ら考え自分で決心する事しなくなる。自分の本心や良心を殺して命令に従うのは奴隷だ。自分の良心や真心に従って、自分が何のために生きるのかを早々に確立し決断できるかどうかだ。死生観は、まどろっこしい哲学ではない。自分の人生の最後をどうしたいかが重要なのだ。現代は、ただ長生きしたいがために、点滴打ちまくってベットに拘束され植物人間化して、誰とも会えないまま何年も生き永らえるような世の中になってしまった。

そんなみっともない生き方でいいのか？ カッコよく自分の人生の幕を下ろしたくないのか。自分が考える一番カッコいい生き様を最後の最後に示すのが日本の戦闘者だろうが！ そのための決心をして、必要な情報を自分で探れ！ 自分の決心通りの人生を目指し毎日を振り絞る！ そして理想とする人生の締めくりを自分で作るんだ！ 実際にそうなるかどうかを心配する必要はない！ 唯々それを目指して生きるだけ！ 俺はそう生きたいと念じているよ。

041